

学問の基礎たる古典

はらしま たかよし
原島隆嘉

(神奈川県／私立慶應義塾高等学校三年)

1. はじめに

「実学における古典」と聞くと、なんだか矛盾したような言い回しに聞こえる。古典とは、一般的に言えば昔の書物のことであるが、果たしてこれが実用性のあるものといえるだろうか。普通に考えれば、答えは否であろう。普段我々が生きているとき、いきなり訓読文を書き下さなければならぬ状況はないし、『春暁』の一節を暗唱しなければならぬような状況もないからだ。しかし、そんな簡単なことで片付けてしまつては議論の余地がない。はじめに疑つてかかるべきは、この「実学」という言葉の定義である。広辞苑(注1)を引くと、実学とは「実際に役立つ学問」とあり、そ

の中の「実学主義」という項には「事実・実践・経験または応用・実験を重んずる立場。(中略)形式化した人文主義の影響を受けた古典本位の教育に反対して十六世紀に起こり、(中略)日本では福澤諭吉が提唱」とある。「古典本位の教育に反対して」という説明を見ると、古典は実学にはそぐわないどころか正反対の立場なのではないかとさえ思われる。

しかしながら、「実学」を表面的な、辞書的な理解だけで議論するのはいささか早計である。まずは、実学主義を提唱した福澤諭吉の思想を深部まで読み解き、「実学」そのものの定義を確認し理解することから始めよう。そして、「古典」の特長について学び、「実学における古典」を考える

ことにしたい。

2. 「実学」の本当の意味

福澤は、著書『学問のすゝめ』(注2)の中で、「実用性のない学問はとりあえず後回しにし、一生懸命にやるべきは、普段の生活に役に立つ実学である」と述べた。具体的に指されたのは、いろは四十七文字やそろばんの稽古などだ。現代の言葉でいえば、読み書きや計算といったところだろう。この定義に沿えば、古典という学問は真つ先に後回しにされそうな学問に思われる。実際、慶應義塾大学出版会『学問のすゝめ』(注3)の末尾の解説文中で、西川俊作は「このように学問の『実用性』を強調することは卑俗な実用主義を思わせ、情操教育や徳育を欠いているという批判を招きやすい」と書いている。しかし、西川は同時に「彼のいう実学、あるいは洋学は目先の実利を追う、速習可能なものではなく、根本的な精神の転換を必要としていたのである」と記し、福澤のいう「実学主義」が辞書的な意味での「実学主義」とは全くもつて異なるものであることを主張している。では、西川が言う「根本的な精神の転換」とは何だろうか。

丸山眞男は、この「精神の転換」について、「福澤の実学に於ける眞の革命的転回」とは、実は、学問と生活との結合、学問の実用性の主張自体にあるのではなく、むしろ学問と生活とがいかなる仕方で結び付けられるかという点に問題の核心が存する」と論じている（注4）。すなわち、学問が

実生活に役に立つ、立たないと二進法的に考えることに実学か否かの判断基準を置くのではなく、実生活への役立て方を考えることが「実学」を考えるうえで重要だということである。また丸山は、江戸時代的な「倫理」の実学と福澤的な「物理」の実学を対照的に捉え、福澤は前者から後者への転換に寄与したと説いている。この「物理」

の実学について、福澤は人間生活を「有形の事物」と「無形の人事（古典などの文学に加え、政治や経済が含まれる）」に分けて考えており、こういった物理学の適用を一応は前者に限定していたが、後者のような領域においてもゆくゆくは「一切の生活領域に自然科学的な計量性が可能になる」ことを期待していたという（注5）。

このように、福澤は「物理学」という言葉を多用して議論しているが、この「物理」という言葉については福澤自身が著作「物

理学の要用」（注6）の中で、「物理はすなわち然らず。開闢の初より今日にいたるまで、世界古今、正しく同一様にして変遷あることなし」と記し論じている。すなわち、物理学とは時代を追っても変化しない、普遍的な学問だと福澤は考えたのである。

3. 古典Ⅱ物理学!?—古典の普遍性—

「物理」の実学とは、先に述べた通り普遍性のあるものと言い換えることができた。では、古典はどうだろう。古典にもある種の普遍性が見られれば、そこに実学としての要素を認めることができる。まずは何人かの言葉を引用して、古典の特長について考えていこう。

中島隆博は、古典とは「過去からの贈り物」であると論じている（注7）。「重要なことは、古典は多くの人々によって書かれ読み継がれて」きたことであって、その本が何百年前という大昔に書かれたものであっても、それが「今」読まれているということ自体に価値があるということである。また、木村勝彦は古典を読むとは「時代も社会状況も異なる人が、現代を生きる自分と同じように与えられた一つの運命をどのようにに受け入れ、格闘したかを知る」こと

だと論じている（注8）。ここである「一つの運命」とは、言わずもがな「死」である。数十年という長いように見えて短い人生をいかにして有意義に過ごすか、そのヒントは先人の記した古典から得られるということだ。

こうしてみると、古典には古くから現代にわたって広く読み継がれてきたという「継続性」という点に特長があり、それ自体に十分といつていいほど価値があるということがわかる。対して、鈴木健一はこの「継続性」に関し、次のように古典の価値を論じている。鈴木は、なぜ私たちは古典を読むのかという疑問に対し、「共感と違和感」という切り口をもって議論を展開している。この共感と違和感という二項対立は、鈴木によれば「普遍的な価値に触れて、自分の基礎を形作ること」と「多様な思考と感情に触れて、自分の幅を広げること」に言い換えられるという（注9）。前者は、数百年前の人間と自分とを対比して重なり合う部分にある種の共感を覚えるということであり、時代を超えても変化しない「今」と「昔」の価値観の類似は、本を読むことを通じて体感できるということだ。その体験は読み継がれてきたからこそ生じるもの

であり、そこには古典の「継続性」が不可欠である。では、後半の「違和感」についてはどうか。実はこゝも、古典の「継続性」が不可欠な部分である。現代の価値観と昔の価値観を比べ、それが噛み合っておらず全く共感できないということは多々ある。しかし、そういった価値観の不連続性を感じられるのも、古典が伝えられてきたという「継続性」があったからではないだろうか。古典は何百年も中身が変わることなく読み継がれる、いわば不朽のベストセラーである。昔から本は数多くの人の手により書かれ続けてきたわけだが、その何億、何京（またはそれ以上）という過去の本のうち、ある一冊が読み継がれていること。その歴史の「継続性」は、福澤が提唱した物理学の「普遍性」と通ずるところがあるだろう。古典も物理も、時代を追っても変化しない不変的な、普遍性のあるものであるという点では変わりがない。するともはや、古典は物理学の一種であるともいえるのではないだろうか。

4・実学に活きる古典の読み方

先に述べた通り、古典にはある種の普遍性が備わっているといえる。また、二番目

の章で確認した通り「実学」とは、簡単に言えば実生活への役立て方を考えることだと言い換えることができた。では、「この実生活への役立て方」という点について、どのようにすれば古典を実生活に役立てられるのか。古典を実際に「実学」として実生活に役立てた先人に小泉信三がいる。ここでは小泉の著書を引用しながら、「実学」に活かすための古典の読み方について考えることにしよう。

小泉は、「古典の読み方」(注10)の中で、「本を読んで、そこに書いてあることを知るのは固より大切であるが、更に一層大切なことは、本を読んで、それから出発して自分で物を考えることである」と述べている。言い換えれば、肝要なことは字義を理解するだけに留まらず、本に書いてあることを噛み砕き、自分のものにするといったところだ。これはすなわち、本の内容を活かし実学に活かせるか否かは読者の資質に依るということである。自分ごととして捉えず、文章の意味も分からずにただ語句や文法だけ丸暗記するといった読み方では、一口に「読んだ」と言っても全く自分のためにはなっておらず、結果として実学としては役に立たない、いわば「薄っぺらい」

読書に終わってしまう。小泉の勧める「自分で物を考えてみる」ことは、いったん活字から距離を取り、一呼吸置いてみることから始まる。本に書いてあった内容を反芻し、あれこれ思索してはまた読み返してみ、といった試みも大事だろう。実際には、私のような高校生が授業で古典を学ぶとき、時間の制約上こういった「深い」読書をする余裕にはあまり恵まれないかもしれないが、何もすべての内容を覚えておかなければ実学として役に立たないとは小泉も言っていない。むしろ、読んでから何か月か経った状態でもなお頭の片隅に読んだ一節のおぼろげな記憶が残っていて、それを思い返すことができたとすれば、その文を読んだ価値は十分にあったと言っているのではないだろうか。そう考えると、中学や高校で学習する古典の授業は、福澤が考えた「実学」教育という点においては全く不足ないものであると言える。実生活にすぐに役に立たないから古典の授業は要らないと考えるのは「実用主義」そのものであり、真の「実学」という観点から見れば、そういった考えは非常に先入的かつ浅いものの見方と言わざるを得ない。

小泉はまた、同書の中で「すぐ役に立つ

本はすぐ役に立たなくなる本である」と論じている。時刻表やレシビをまとめた本は、読めばすぐに役に立つ知識が載っており確かに便利ではあるが、そういった卑近な本を読んで得た一時的、短期的な知識を「実学」と呼ぶのはあまりに浅はかである。本に「実学」として有用な本は、普遍的な価値を持ち半永久的にその知識や知恵を役立てられるものであり、我々は急いで読書の利益を得ようとはならないのだ。再度にはなるが、実学とは自分のものにして初めて「実学」と呼べる。本に書いてあることを自分のものとして習得するのはある程度時間がかかるが、逆に一度自分のものにしてしまえばその知恵を失うことはない。実は、小泉は明治に生まれ大正教養時代と言われる年代に育った人物である。そんな小泉が、なぜ戦後間もない混乱の時代にわざわざ古典が必要だと説いたのか。それは、先人の知恵を知り、「実学」として古典を役立てることの重要性を知っていたからである。「実用主義」とは程遠い「実学主義」の精神を、小泉の文章から学び取ることができるだろう。

5. 実学に役立つ古典の例

前章では古典の「読み方」について考えたが、その前にそもそもどのような本を読めばよいのか。小泉は「読書論」(注11)の中で、古典を読むならば大著を読むことを勧めている。その理由として「吾々は単にその書の内容を知るばかりでなく、辛苦耐忍、謂わば格闘してものを学ぶという、貴重な体験を得る」ことができるからだと述べている。「大著」とは単にページ数の多い本を指すこともあるが、高名な書籍を指す場合もある。いずれにせよ、苦しんで難解な文章を読んだ中に何か一つでも心に残る「教え」を見つければ、人間としての成長に大きく寄与するといえるのではない。例えるならば、砂浜を掘って一握りの金を見つけ出すようなものだ。「○○○をするなら△△すべし」と書いてある短絡的な本は現代において数多く出版されているが、そういったものを読むよりもずっと勉強になることには間違いない。また、当然のことではあるが、有名な本というのは有名になっただけの理由がある。名作と言われる本は、古くから現在に至るまでにたくさん人間がその本を読み、共感を示し

たり違和感を覚えたりすることで次の世代に刻々と伝えられていったのである。そういった意味で、「大著」と称されるような本は他の一般の書籍よりもより普遍的な価値が高いといえる。

こういった「価値が高い」とされる古典には古今東西様々あるが、ここでは教科書にも掲載され誰もが知っているであろう『論語』(注12)を挙げ、具体的に実学との関わりについて考えることにする。この『論語』は言わずもがな、古代中国の思想家である孔子の発言や思想が収められた漢文書である。全十巻二十編にわたる長大な文章から構成されたこの書は、全くもって大著といって差し支えない。ここでは、そのうち第四巻に収められた文章から、一節を挙げる。「子曰、学如不及。猶恐失之。」(泰伯第八)——「学問はいくら突き詰めても突き詰められないものだ。それでもなお、得た知識を忘れ失ってしまうことを恐れるのである。」——孔子は今から二五〇〇年ほど昔の人物だが、この言葉はそっくりそのまま現代の学びに当てはめられる。私はこの一節を見たとき、どこか痛いところを突かれているような気がしてならなかった。試験が終わればきれいさっぱり内容を

忘れ、また試験が近づくと詰め込み始める。

そんな付け焼き刃な勉強は、本当の学びと呼べるだろうか。否、そのようにして身につけたかのように見える知識は、到底「実学」と呼ぶことはできない。というのも、試験が終わって「きれいさっぱり」忘れてしまったならば、その時点で得た知識も知恵も脳内から流れ出てしまったことになるからだ。当然ながら「実学」として役立つこともなく、脳内ではその文章は「なかったこと」になってしまう。もちろん試験のため勉強するのが悪いとは言えないが、せっかく歴史ある古典と出会い、もし幸運にもその文の中で「これ」という学びに繋がる一節を見つけたならば、試験や勉強とはまた別の機会に思い返してみることが必要だろう。そういう意味では、「実用主義」とは試験で点を取るというだけが目的の勉強とも言え換えられるのかもしれない。対する「実学主義」については、それが試験に問われることもないため、目的が見つけづらく、勉強のやる気が出にくいように思える。しかし、実際に福澤が重要視した「実学」を身につけるには、後者のような本質的な学びを続けていくしかないのである。

6. おわりに

この小論文では、まず福澤の思想に触れながら「実学」という言葉そのものの意味を探究し、次に古典の特長について考え、今度は小泉の思想を軸にして実学と古典との結び付け方について論じてきた。その中で種々の文を引用することにより私の考えを述べてきたが、その引用元には例えば「学問のすゝめ」や「物理学の要旨」といった、現代から見ればはるか昔の古典的な本も含まれている。当時書かれた文章が全く変わらずに現代に読み継がれているからこそ、こういった歴史ある文章を引用して論じることができるのであり、この小論文のように自分の意見をまとめて文章を書くという営みも、ある意味で「実学への古典の接続」と言えよう。先に福澤の著書を引いて、「古典は物理学と通ずるところがある」と述べたが、実学に幅広く密接に関わっているという意味では、もはや古典はすべての学問の基礎として精神的な役割を果たすといっても過言ではない。

我々はいくつた普遍的、継続的な「古典」から何を学び取り、自分の血肉とすることができだろうか。実学に続く道は、古典の中に開かれている。

〈参考文献〉

- (注1) 新村出『広辞苑 第六版』岩波書店、二〇〇八年
- (注2) 福澤諭吉(齋藤孝訳)『現代語訳学問のすすめ』ちくま新書、二〇一一年
- (注3) 福澤諭吉(小室正紀・西川俊作編)『学問のすゝめ』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年
- (注4) 丸山眞男『丸山眞男集 第三巻 福澤に於ける「実学」の転回』岩波書店、一九五五年
- (注5) 同右
- (注6) 福沢諭吉(山住正己編)『福沢諭吉教育論集 物理学の要旨』岩波文庫、一九九一年
- (注7) 中島隆博・梶原三恵子・納富信留・吉永千鶴子『扉をひらく 哲学生活の鍵は古典のなかにある』岩波ジュニア新書、二〇二三年
- (注8) 同右
- (注9) 鈴木健一『古典注釈入門 歴史と技法』岩波現代全書、二〇一四年
- (注10) 小泉信三『小泉信三全集 第一巻 古典の読み方』文藝春秋、一九六七年
- (注11) 小泉信三『小泉信三全集 第一四巻

読書論』文藝春秋、一九六七年

(注12) 土田健次郎(訳注)『論語』ちくま

学芸文庫、二〇一三年